Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『論理哲学論考』における意味の言語内在性の主張について |
| Author(s) | 松本, 洋之 |
| Citation | 年報人間科学. 1983, 4, p. 105-121 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/8385 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学人間科学部〔一九八三年二月〕
『年報人間科学』第四号　一〇五頁―一二一頁

# 『論理哲学論考』における意味の言語内在性の主張について

松本洋之

# 『論理哲学論考』における意味の言語内在性の主張について

本稿では、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(Tractatus Logico-Philosophicus 以下『論考』(T) と略記) における言語理論を原初的なかたちで取りだして、その言語理論が同書の基本的論点を結果させる次第を検討したいと思う。この作業を通して得られる本稿の主張は、語の意味に関する対象指示理論 (referential theory of meaning) として現在流布している『論考』評価が極めて不十分であり、この点に基づいての批判は説得力を欠く、ということである。いわゆる後期における意味の使用理論との対比においてしばしば強調されるこの評価は、『論考』の眼目を捉えたものとは言い難い。むしろ眼目は命題の意味 (Sinn) の言語内在性の主張にある。命題によっては語られえずしてただ示されるだけしかない事柄が存在するという思想も、第一次的にはこの主張からの帰結なのである。

## 一

語の意味に関して『論考』が対象指示理論を採るとする評価は基本的には正しい。語とは本来要素命題に登場する名であり、「名は対象を意味している (bedeutet)。対象が名の意味 (Bedeutung) である」(三、二〇三) という主張がこの評価を支持している。しかしこの主張をもって『論考』がいわゆる指示理論を採ると見做し、その点に難点を求めるのであれば、批判は論点を逸していると言わざるをえない。

確かに後年のウィトゲンシュタインは右の見解に対して執拗な批判を繰り返しており、この事実は『論考』の立場の困難を裏書きしているように我々に思わせる。例えば『哲学的文法』のなかには次のような発言が見出されるのである。

「私の哲学的究明のうちに私がかつて取りいれていた意味 (Bedeutung) の概念は、原始的な言語哲学に由来している。≫Bedeutung≪ は ≫deuten≪ からきている。」(一)

この一節に続いては、専ら名詞のみに注目するために語の名指し機能を強調しがちな結果となるアウグスティヌス的言語観が言及されており、その言語把握の一面性が批判されている。従ってこの一節は、『論考』が名を言語の基礎とし更には名の意味を名の担い手と同一視した点に対する彼自身の自己批判だと解することができよう。それは、アウグスティヌス批判が同じ議論形式で『哲学探究』

冒頭に再び現われ、次のような註釈が加えられていることからも明らかである。すなわち、アウグスティヌス的言語観に従えば

「言語に含まれている諸々の語は対象を名指している、――文とは、そうした名指すものの結合である。このような言語像のうちに次のような考えの根があるのだ。すなわち、どの語も意味をもっている、この意味は語と並列している、それは語が代表している対象である、という考えである。」(2)

どの語も意味をもち、その意味とは語と並列した、語の代表する対象である、――これは『論考』の見解に他ならない。『哲学的文法』においてウィトゲンシュタインが原始的だと評したのは、こうした『論考』の見解であったことが改めて確認できる次第である。

しかしながら「原始的」とはいかなる謂いなのか。これが問題である。彼のアウグスティヌス批判を俟つまでもなく、我々の言語が名詞だけから成立しているわけではないこと、さまざまな種類の語のなかで殊更に名詞を基礎的な位置におくのは恣意的であること、これは自明に思われる。まして語の意味とその指示対象とを同一視するのは荒唐無稽な錯誤だとも言えよう。その場合、指示される対象の存在の身分がすぐに問題となるし、加えて不変化詞とか、実在しない対象を意味する空虚な名とか、反論の材料には事欠かないからである。『論考』の原始性はこのような言語の実情の看過にあるのだろうか。

そうではない。いわゆる指示理論のもつ右のような困難を『論考』は背負ってはいない。アウグスティヌス流の対象指示理論が採られているわけではないからである。そもそも『論考』にあっては語は名に他ならなかった。そして名の機能と言えば、それは対象指示に尽きるのである。通常の固有名を考えてみればこの点は容易に理解されよう。語の意味と指示対象との同一視はこの場合何ら奇妙なものではない(3)。奇妙なのはむしろ語と名との同一視であろう。名が言語のうちに占める位置は実情として必ずしも大きくはないからである。それにもかかわらず『論考』は名を言語の基礎と考え、「要素命題は名から成る。それは名の連関・連鎖である」(四、二二)と主張している。この主張が言語の実情と相反するのは明らかである。従って、たとえ要素命題が通常の命題とは異なり分析の最終項として登場するにせよ、この点に対しては実情の看過だと咎めることができそうに思われるかもしれない。しかしながら問題はそう単純ではない。この主張は意識的な命題モデルの提出であって、実情の観察報告ではないからである。『論考』において名は秀れて術語化された位置を占めており、通常の語義でもってこれを解してしまえば論点の所在は全く見失われてしまうだろう。確かにここにはアウグスティヌス的言語観と同根の側面が窺える。その意味で着想は原始的だと言える。しかし着想の原始性が徹底して昇華された地平に『論考』は成立しているとも言わなければならない。それはもはや原始的と称しうる地平ではないのである。本稿ではこうした観点から『論考』の主張の真意を確認したいと考える。

もとよりこのような観点は、後期のウィトゲンシュタインからすれば不健全な哲学的策略でもあろう。従って本稿の主張は先の自己

批判の論点を覆い隠す結果となるかもしれない。後期思想の基調には理論的な術語化や一般化に対する彼の根強い不信があり、日常的概念を一面的に昇華し敷衍させた結果として自ら生みだした陥穽のなかで哲学は自縄自縛の状態にある、とされているからである。哲学的な語彙を「その形而上学的な使用から日常的な使用へと再び連れ戻す」(4) と表明されるのも、この故である。何よりも警戒されなければならぬのは「一面的な食餌」(5) であり、そこから導かれた徒らな説明は百の害をもたらすだけである。――このような基本的態度からすれば、名への注目という『論考』の出発点そのものが一面的として責めに値いするし、この着想の論理的展開という点に至っては論外となる。徒らな説明が結果するだけに終ることになろう。しかしながら『論考』の議論もまた、「徒らな説明」を排するために目論まれたものであったのである。我々はこれを忘れてはならない。意味論的な詮索が無用であり、すべてが見透しのきいているかたちで日常言語を把握することが、『論考』の努力だった。意味論的概念は形式的概念として本来ならば言語のうちに登場するはずがなく、ただそこに「示される」だけである、という思想がこれを物語っている(6)。その点で、原理的には日常言語のうちに事態は正しく見透されうるのでありまた見透されるはずだという確信は、『論考』の確信でもあった。「我々の日常言語の命題はすべて、そのあるがままのかたちで、事実上論理的に完全に秩序づけられている」(五、五五六三) とは、その表明である。つまり『論考』は、論理的に完全な理想言語を構成しようとしたというよりも、むしろ日常言語のうちに論理的に完全な見透しを獲得しようとしたのである。従って確かに戦略的には後期の立場と正反対であるとはいえ、メタ理論の余地のない見透しが日常言語自身に与えられているはずだとする信念では、前期と後期には互いに通じあうものがあると言える。

もちろん戦略の違いが含意するところは大きく、それは哲学のパラダイムの相違を意味している。後期の観点を貫けば、『論考』の言語把握は単に単純で一面的であるにはとどまらず、限定された局面(7)においてさえも全く有効性を失う結果となろう。いまや力点は、社会制度を取りこんだ発話情況のなかで発話が情況に対してもつ効力に移され、その効力の所以が質されることになるのである。しかしこの言語ゲームというパラダイムからの批判を浴びながらも、『論考』がこれとは独立のパラダイムをもっていたということも事実である。従って後期での警告に逆らう結果とはなっても、本稿ではそのパラダイムの摘出に努めたい。翻ってそれは、『哲学探究』の公刊を『論考』と併せるかたちで願ったウィトゲンシュタインの意図を逆照射する役にたつとも考える。『論考』が重要でない著作であるとは、彼は一度も見做したことがないのである。

## 二

『論考』のパラダイムとは言語の写像理論である。名を言語の基礎とする考え方もそれからの論理的帰結である。すなわち、命題は

事実の像であるという着想を徹底して展開させた地平に、『論考』の名の理論が成立している。そこで写像理論の検討から議論をはじめよう。

言語による現実の写像という着想は、命題が世界における事実（可能的事実を含む）を伝達しうるその根拠を求めるなかで獲得された(8)。その過程はおよそ次のようなものである。①命題を見て我々はその語るところ、すなわちその意味（Sinn）がただちに理解できる、改めて説明される必要はない、――それは何故なのか。②それは命題が事実に対して或る本質的な連関を有しているからではないだろうか。というのも事実の理解に際しては、その事実を見さえすればそれがどのような事実であるかは即座に理解することができるからである（本が机の上にある、本の右にはペンがある、……）。③命題の場合にも全くこれと同様の事情があるからこそ事実を伝えることが可能であり、しかもその意味がただちに理解されるのではあるまいか。象形文字がその好例だと思われる。④従って命題は、事実と同様の構造をもった、これまた一つの事実だと言うことができるだろう。だからこそ、これまでに聞いたことのないような命題でも、初めて目にする事実と同じようにして理解可能なのである。⑤もちろん命題の場合には、或る事実を伝えていながらもそれが偽だということがある。そのような事実が成立していないときである。しかしそれが偽だと言えるのも、一方の事実（命題）が他方の成立している事実と或る点で合致していないからであって、この不合致は命題が事実と同様の構造をもっていればこそ可能なのである。⑥命題が事実と同様の構造をもっているとは、すなわち命題が事実の像であるということである。

このようにして、「命題は像であるかぎりにおいてのみ何事かを言明する」（四、〇三）と結論される。『論考』はこの原始的とも称しうる着想を論理的に徹底して展開した書なのである(9)。

着想の基本的モデルが事物の空間的相互配置にあることは右に示唆されている。それは例えば、本が机の上にあるという極く馴じみの配置である。この場合には、本と机とがまさにそのような配置にあるということが、本が机の上にあるという事実に他ならない。別様に配置されていれば、それは例えば、本が机の下にあるという別の事実となる。これらの場合に重要なのは、ともに本と机との相互配置が事実の構造をなしており、我々はその配置を見るだけで事実を理解することができる、という点である。事実の構成要素は本と机であり、その構成要素どおしの関係が事実の構造であって、この構造は眼前に呈示されているのである。

命題の場合にも本来的には(10)これと類比的だとされる。「a」と「b」とを名とするならば、この二つの名が表記レベルにおいて或る配置にある（例えば、「a b」という具合に）ことが命題を形造る。このことによってその表記は一つの事実たる資格をもち、aとbとがしかじかの関係にあるという事実の像となっているのである。すなわち、その事実を写像し、それを表現しているわけである。「a」と「b」が別様に配置されていれば、それはaとbとの別の関係を表現していることになる。もちろん「a」と「b」とがaと

bそのものではないように、前者の配置が後者の関係そのものである（aがbの上にあるならば、「a」も「b」の上にある）というわけではない。対象の命名が任意であるのと同じく、どのような名どおしの配置がどのような対象間の関係を表現するかも任意である。しかし一旦決定が下されたならば、しかじかの名どおしのしかじかの配置は、しかじかの対象間のしかじかの関係を一意的に表現することになる。この約定は言語にとって本質的なものである。

命題は偽でありうる以上、名による指示が適中していなかったり、名どおしの配置が目論見とは違う関係を写像していたりすることもあるだろう。しかしその場合にも写像要件が既に満足されていることには変わりがない。それぞれの名が何らかの対象を必ず指示しており、名どおしの配置が対象間の或る可能な相互関係を論理的に写像している、――この写像要件の満足が命題の命題たる所以をなしている。名が何ものをも指示していなければその名は端的に名ではないのであるし、その配置が論理的に許容されないものであればその配置は端的にナンセンスなのである。しかしながらこの論点は、命題の意味が既に確定しているという主張に等しい。意味が確定していなければ偽ということさえも意味をなさない。命題の意味はその真偽から独立しており、真偽可能性の前提である。「命題を理解するとは、それが真であれば何が成立していることになるかを知ることである（従って、命題が真であるかどうかを知らなくとも命題を理解することができる）」（四、〇二四）とは、『論考』の基本的主張をなしている。

「命題の可能性は、記号による対象の代表という原理に基づく」（四、〇三一二）と同時に、「命題記号は、その要素である諸々の語が命題記号のうちで一定の様式で相互に関わっている、ということに存している」（三、一四）と主張されるのは、右のような事情に由来している。これがウィトゲンシュタインの見た、命題と事実との連関なのである。「像（すなわち命題――引用者）はこのようにして現実と結びついている。つまり像は現実にまで届いているのである。」（二、一五一一）彼が抱いた確信はこのように極めて強力に表明されている。

以上の原始的写像モデルは極端であるだけに『論考』の言語理論の骨格をよく示していると言える。たとえ荒唐無稽に思われる(11)にせよ、『論考』がこのモデルを支持していることは次の二節から明らかに読みとれる。

「命題記号が文字記号の代わりに空間的諸対象（例えば、机、椅子、本）から合成されていると考えてみるならば、命題記号の本質は極めて明瞭となる。この場合、これらのものの相互の空間的配置が命題の意味を表現している。」（三、一四三一）

「『複合記号 'aRb' が、aはbに対して関係Rにあるということを語っている』というのではない。「a」が「b」に対して或る関係にあるということが、aRb ということを語っているのである。」（三、一四三二）(12)

この二節は、命題は構造をもっており単なる名のクラスではない、という三、一四から三、一四三にかけての論点の例証として登場し

ている。すなわち、名は構造をもたずそれ故事実ではないので、現実を写像することができない、命題はこれに対して構造をもつという点で名と決定的に異なる、という論点を具体的なかたちで強調したものである。しかし同時に、先に述べたような原始的な写像モデルをも提供していると言える。というのも、命題と名との相違点こそ命題の写像作用の根拠であるからである。命題の構造は、具体的には先のような名の相互配置として考えられていたことが確認できよう。

このモデルにおいて特徴的なのは、命題には名しか登場していない、という点である。その意味では名はまさに言語の基礎とされている。しかし、それがアウグスティヌス的言語観と同じ意味においてではないことは今や明白であろう。「要素命題は名から成る。それは名の連関・連鎖である」という先に引用した一節は、こうしたモデルに基づいた主張なのであり、写像という着想を徹底させることによって生まれた見解なのである。というのも、本と机とのあいだには両者を結びつけている第三者というものは存在せず、これと同様に「事態のうちで諸対象は鎖の輪のようにして相互にひっかかっている」(二、〇三)のであるから、これと「同じ論理的(数学的)多様性」(四、〇四)を備えているべき要素命題も、名の直接的な結合でなければならないのである。従って対象の結合様式に関する記号(「〜は…の上にある」というような述語記号)は命題には登場しない。語られている事実の側においてそうであるのと同じく、それは対象の符牒である名どおしの相互配置によって表現されるのである。対象の結合様式というものは対象が存在するごとくには世界のうちに存在しない以上、現実を写像している言語においても、これに対応するものは名が登場するごとくには命題のうちに登場しない、――このように『論考』では写像の着想が厳密に維持されている。先に原始性の徹底と述べたのは、極く単純な事実から命題の構造を類推し、この類推を右のように厳密に維持している点に対してである。名への注目にはこのような然るべき理由があった。何ら無定見な発想ではないのである。

要素命題には述語記号が登場しないという論点は、「要素命題を私は名の関数として、"$fx$"、"$\phi(x,y)$"等の形式で書く」(四、二四)という一節と相反するように思われるかもしれない。この一節では、要素命題のなかの述語記号が明瞭に言及されているからである。しかしこのような表記は、配置されている名のうちの或る一部だけに着目し、着目された名とそれ以外の名との配置を便宜的に述語記号で置き換えたものだと解することができる。従って、例えば四個の名から成る要素命題があるとすれば、その一つに着目した場合には"$fa$"、その二つに着目した場合には"$\phi(a,b)$"とそれぞれ表記が可能であり、これらは"$fx$"、"$\phi(x,y)$"という関数の値として得られるのである(13)。それ故に四、二四は我々に対する反証とはなりえない。

## 三

以上において写像理論の原型を素描してきたが、このモデルから

は先づ次の三点が帰結する。

第一には、『論考』のいう対象とは個物であって性質や関係ではない、ということである。『論考』以前にはウィトゲンシュタインは性質や関係もまた対象であると考えていた(14)が、この想定は『論考』でははっきりと棄てられていることが解る。これらは対象間の結合様式に他ならず、対象自身とはその身分を異にするからである。従って名もこれらを代表してはおらず、名の指示対象の身分に関する問題は『論考』において普遍個物議論のかたちでは生じる余地がない。単純で合成されない世界の実体、不変なるもの、存立するもの、と規定される(15)とき対象の身分は認識論的に不分明さを免れないが、それは要するに何らかの物なのである。

しかしながら単純で合成されないものであるが故に、対象は単独では自らの実質的な性質を決定することができない(16)。繰り返すように、それを決定するのは対象間の関係である。いかなる実質的性質をもちうるか、すなわち他のいかなる対象と結合しうるか、は対象自身において既に決定されており、それが対象の形式とされるものである(17)が、この形式は実質的な性質ではない。それは例えば、「赤い」というような性質ではなく、たかだか「色をもつ」といった形式的性質に過ぎない。「赤い」という実質的性質はウィトゲンシュタインにとっては一つの事実である。事実の本質を彼は構造に見る。そして構造とは対象間の結合様式に他ならない。従って単独の対象の構造というものは意味をなさず、対象は単独では実質的性質をもつことができないのである(18)。けだし、「対象はその名をよぶしかできない。……対象は、それについて喋ることができるだけであり、それを口で言い表わすことはできない」(三、二二一)と言われる所以である(19)。しかるにこのことは、名が意味(Sinn)をもたないということに等しい。これが第二の帰結である。

名とは対象の符牒に他ならず、名に対して『論考』は対象指示の機能だけしか認めていない。これに対して命題は、名どおしの配置によって対象の実質的な性質を与え、何事かを語っているという意味で、意味をもっている。名と命題とのこのような対比は、記号によって「表示されるもの(das Bezeichnete)」とその与えられ方(die Art des Gegebenseins)」との対照としてフレーゲから受け継がれながらも、この対照を極めて先鋭的に提出したものである(20)。すなわち名に意味機能を認めない点で、確定記述をも固有名に含めるフレーゲと『論考』は決定的に袂を分かつのである。そうすると、「名は対象を意味している。対象が名の意味である」という先に引用した一節は、この翻訳の限りでは不適切さを免れない。意味(meaning)の二つの側面としてのSinnとBedeutungとの区別は従来の翻訳においても厳密に維持されているとはいえ、本稿では名の指示機能を明確に表現するために前者を「意味」、後者を「指示されるもの」として以下明示したい。従って右の一節は、「名は対象を指示している。対象が名によって指示されているものである」と読まれることになり、『論考』の真意をより的確に伝えるものと考える。

名が意味をもたないというこの帰結は、対象に形式的性質が付与

されている点と相反するように思われるかもしれない。対象は全くの裸というわけではなく形式的にではあれ或る規定を有しており、従ってこれを指示する名は意味を全然もたないわけではない、とも考えられるからである。しかしこれは、言語における名の振舞いが論理的に決定しているというに過ぎない。そしてその振舞いは、名が命題に登場していてはじめて決定されていると言いうるのである。形式は具体的な構造から読みとられるしかなく、単独で自律しているものではない。かくかくの構造をもっているということの総体、それが形式である。従ってこれとは独立に対象の形式について語ること、つまりは名の意味について語ることはナンセンスであろう。名は対象の符牒であるだけであって意味をもたないという論点はこうして保持されることになる。

ところでこの論点は第三の帰結へと我々を導く。名は、そもそも指示されるものでさえも、命題のなかでの使用を離れてはもっていない、という帰結である。というのも名が単独では意味をもたないとすれば、名だけではその指示対象を同定することができないからである。この事情は通常の固有名の場合と類比している。社会的慣習から或る種の含意を備えている固有名もある(例えば、人名など)が、一般に固有名の場合には、それが何を指示しているのかは言うに及ばず、いかなる類いのものを指示しているのかさえ、単独では全く理解することができない。確定記述に置き換えないとすれば、固有名は命題に登場してはじめてその指示対象が同定可能となる。もちろん命題のうちに使用されているだけで既に同定が果されているというわけではないが、少くともそれは同定のための必要条件ではある。単なる直示によっては多義性を免れないからである。「命題だけが意味をもつ。命題という連関のなかでのみ、名は指示されるものをもつ」(三、三)と主張される理由はここにある。この主張は元来『算術の基礎』におけるフレーゲの主張であったが、それは第一次的には数という対象に関する議論においての主張であった(21)。『論考』はこのフレーゲの主張を名一般にまで適用しているのである。

以上が写像モデルから帰結する『論考』の名の理論である。その言語理論が名を基礎においていることはこのようにして確認することができる。しかしそれは事柄の半面であるに過ぎず、むしろ強調は名どおしの配置がもつ構造にあることもまた明らかであろう。名は対象の符牒と見做されているだけで、単独では全く無力なのである。その指示機能さえも配置という構造を俟ってはじめて発揮される。その意味で、ウィトゲンシュタインの自己批判は事柄の半面においてはまことに正鵠を射ているけれども、中心的論点には言及していないと言わなければならない。指示理論としての一般的な『論考』評価もまた同様である。確かに『論考』の言語理論は原始的な性格を持っている。しかしその中心的論点は原始性の徹底のなかに潜んでいたのである。これがいかなる含意をもっているか、以下それを検討しよう。

## 四

先づ注目に値いするのは、意味と指示されるものとの言語表記に

おける差異である。すなわち、後者が言語表記のうちに文字として登場したのに対して、前者はその表記様態として登場し、それ自身としては本来記号化されなかった。記号化すれば写像の着想が崩壊してしまう。しかるにこのことは、命題の意味と名によって指示されるものとが言語に対してそれぞれ有している内的関係と外的関係との差異を物語っている。表記様態が言語それ自身の属性であるのに対して、名は言語外的な対象の符牒として言語のうちに痕跡を留めているに過ぎないからである。ここには歴然とした差別がある。従って命題の理解と名の理解とのあいだにも決定的な差別が生まれる。それは、「単純記号（語）によって指示されているものを理解するためには、それが我々に説明されなければならない。しかし、命題に関しては我々は解りあっている」（四、〇二六）という点での差別である。符牒としての名が或る様態で表記されていることが命題の命題たる所以をなし、そしてこの表記法は言語自身の論理性によって決定されている以上、命題の理解は命題自身から得られるのである。「命題記号の意味は説明されていなくとも理解される」（四、〇二二）という繰り返して強調される論点こそ、『論考』の主張の眼目に他ならない。それは、意味の言語内在性の主張である。

従来の解釈はこの本稿の立場とは対蹠的な位置にあるように思われる。命題が事実の像とされることにより、その意味の源泉は事実との対応という言語超越的なレベルに求められているとして、『論考』における意味の言語外在性が説かれてきたからである(22)。しかしながら命題のもつそのような事実との対応力こそが命題の意味なのであり、それは言語の論理的写像作用によって言語自身が生みだすものなのである。意味の源泉を求めるとすれば、この対応力の根拠に求められなければならないだろう。そして『論考』はそれを言語のもつ構造だと考え、この構造は言語にとって内的なものだと主張するのである。この観点は何ら奇矯ではなく、一般の言語理論と同様のものである。確かに言語の構造は『論考』にあっては事実の構造から読みとられている。しかしこの点は、命題が事実について語るという命題の本質（少なくともウィトゲンシュタインはこれを命題の本質と考えた）から要請されているに過ぎない。言語がそのような構造をもちうるということはそれとはまた別のことなのである。

意味の言語内在性の主張は、「命題はその意味を示している」（四、〇二二）という主張に端的に表わされている。写像モデルから明らかなように、対象間の結合様式は文字によっては表現されず、文字の表記様態のかたちで読みとられるしかない。しかるにこの表記様態こそが対象の実質的な与えられ方を表現しており、従って命題の意味なのであった。それ故に、意味は示されるものであって語られるものではないのだ。言語は自らの属性を対象化して語ることはできない。その属性を俟ってはじめて命題は語ることができるからである。これが、命題の意味は示されるという主張の理由である。ここに我々は、「示されうること」と「語られうること」との『論考』における周知の対立が最も基本的な姿で現われているのを見ることができる。「示されうることは語られえない」（四、一二

一二）というテーゼは、事実命題のレベルで既に提出されているのである。

しかしここで反論が予想される。『論考』は「命題はそれが語っていることを示している」（四、四六一）とも主張しており、両者の対立が事実命題においては崩れるのではないか、という反論である。しかしこの反論は成立しない。もちろん命題は事実について語っているが、命題が語るとは、事実を対象化してかくかくの事実が成立していると主張することであり（それは真偽いずれであろうと構わない）、そのかくかくであるということは既に命題において示されている、というのが『論考』の論点だからである。命題の示していることが事実において成立しているという主張が、すなわち命題による語りなのである。従って、命題の示す機能はその語る機能の前提をなす。事情はかくかくであるということが命題において示されていないとすれば、それは語ることもなしえないであろう。この場合、真偽を問うことも当然不可能となってしまう。結局、命題は意味をもってこそ何かを言明できるというだけのことである。従って「命題はそれが語っていることを示している」とは、命題の意味は示されているという主張と同じ主張に過ぎない。そしてその語られていることは、すなわちその意味は、再び語られえずして示されているのである。

このように命題の意味とは、名の相互配置にあり、その構造、その論理形式の顕現、にある。しかし従来では、『論考』における論理は論理学の命題が示す真理関数的論理に重点をおいて論じられてきたように思われる。「示されうること」と「語られうること」との対比も、この真理関数的論理に則して言及されることが多かった。それは、トートロジーや矛盾が明らかに何も語ってはいない（かくかくの事実が成立しているとは主張していない）のに世界の論理を示すとされている点に、両者の対立が際立たせられているからでもあろう。すなわち、「論理学の命題はトートロジーである」（六、一）から「論理学の命題は何も語ってはいない」（六、一一）、しかし「論理学の命題がトートロジーであるということは、言語の、すなわち世界の、形式的—論理的—性質を示している」（六、一二）という主張に見られる対立である。「『論理定項』は代表を行なわない、これが私の根本思想である」（四、〇三一二）という発言を俟つまでもなく、真理関数的論理が自らの代表する対象を世界のうちにはもたず、従って語られえずして示されうるだけであることは、写像モデルからも明らかである。否定は対象どおしの結合様式に関わるもので、対象と同様には世界のうちに存在していない結合様式に対しても更にメタのレベルにある(23)。事実と事実との結合もまた、対象どおしの結合に対するメタレベルでの結合である。従って写像モデルに固執する限り、論理定項も本来は記号化しえない記号となろう。論理定項が代表機能をもたないとはこの謂いである。そして論理定項がこうした性格のものである以上、真理関数的な論理が諸命題の構造自身から読みとられるべきことは明らかである。我我の述語記号が名どおしの配置に対する便宜的な表記法であるとすれば、これと同じく、命題どおしの結合に対する論理定項もそれに

対する便宜的な表記法に過ぎない。「適切な表記法をすれば諸命題の形式的性質は諸命題を注視するだけで認識できるから、論理的命題がなくとも我々はやっていける」（六、一二二）と言われる所以である。こうして、「論理学の証明は、トートロジーが複雑なところでそれを容易に認識するための機械的な補助手段に過ぎない」（六、一二六二）とまで言われることになる。

しかしながらこの論点は、論理学の命題が示すとされる世界の論理は実のところそれぞれの事実命題において既に示されている、ということに他ならない。すなわち、

「すべての命題の形式についてそもそもはじめから語られうることはすべて、一挙に語られうるのでなければならない、ということは明らかである。

実際、要素命題のうちにすべての論理的操作が既に含まれているのである。というのも、"$fa$" は

"$(\exists x).fx.x=a$"

と同じことを語っているからである。

合成の存在するところでは独立変項と関数とが存在している、そしてこれらの存在するところではすべての論理定項が既に存在しているのである。」（五、四七）

従って、事実命題と論理学の命題とのあいだに明確な一線を設け、専ら後者にのみ言語の示す機能を強調するのは、極めてミスリーディングである。事実命題のシェーマとして論理学の命題は特定の事実命題とは異なったレベルで論ずることができるとはいえ、このシェーマが内在している形式は特定の事実命題どおしの形式なのである。論理学の命題がその論理形式を示しているとすれば、それは何よりも先づ事実命題において示されていることになろう。

以上から我々は、『論考』のうちに意味の言語内在性の主張を読みとることができると考える。もちろんそれは言語が現実の像であるとする限りでの主張であり、言語行為の自己目的的な自律性が提出されているわけではない。それは言語の機能を専ら事実描写に制限しているからである。その点で、議論に発端からして大きな制約が付随していることは否めないだろう。しかし事実描出のための写像能力が言語に本来的であるとする主張は、命題の意味が命題自身の構造として命題に内的であるという論点を導くのである。『論考』がたとえ言語事実に対して大きな制約を設けているとしても、このような意味での言語内在性という主張は『論考』の言語理論の基本であると言うことができる。

## 五

さて、右のような命題の理解に対して名の理解は全く対照をなしている。この論点について最後に触れておきたい。

名の指示するものは命題によってはじめて同定可能になるとはいえ、その指示されるものは命題の意味のごとくには命題のうちに示されていない。これは極く当然のことで、指示されるものは言語外の存在者であるからである。命題が示しているのは、名が何らかの

対象の符牒としてそれを指示しているはずだということだけである。それがどの対象であるかは言語内的な事柄ではなく、命題の関与するところではない。「a」という文字表記からはそれは読みとることができない。従って、名によって指示されているものは説明されなければならない、とされたわけである。

それではいかにして説明されるのか。この問いに対して『論考』は一見したところパラドクシカルな解答を与えている。すなわち、

「原始記号によって指示されているものは、解明によって説明できる。解明とはその原始記号を含んでいる命題である。従って、これらの記号によって指示されているものが既に知られている場合にのみ、解明は理解できる。」(三、二六三)

これまで幾人かの論者たちの議論の的となったこの一節は、我々に循環の印象をもたらす。指示されているものを説明する解明自身が、指示されているものについての知識を前提してはじめて理解される、とされているからである。しかしこの解答は一見する程にはパラドクシカルではないし、ましてや解明の不可能性を示唆するものでもない(24)。

先に述べたように、対象の同定は命題を俟ってはじめて可能となる。従って解明が命題の体裁をとることは当然である(25)。しかし命題の意味は命題自身において理解されるとはいえ、命題だけからはそれがどの事実について語っているのかは解らない。かくかくの事実について語っている、ということが解るだけである。そこで解明とは、命題がどの事実について語っているのかを指摘することによって、名が指示しているものを説明することに他ならない。しかしながらもしaを知らなければ、「aがbの上にある」という命題が、aがbの上にあるというまさにこの事実について語っているということは理解できないだろう。故に、指示されているものの説明という役割を担う解明を理解するためには、aの知識(それが「a」とよばれることは知らないにしても)が前提されるのである。

そこで、三、二六三の主張は次のように解することができる。「a」という名があるとする。この名が指示しているものを説明する場合には、例えば、「aがbの上にある」という命題が語られればよい。命題の意味はただちに理解されるし、私はaを知っているから、「a」がまさにaを代表していることがそれによって理解できることになる。

命題の意味を理解しているということが、すなわち名によって指示されているものを知っていることなのだ、とする石黒氏の見解(26)には同意できない。解明とは名が言及されているのではなく使用されている命題のことであるという氏の論点には賛成したいが、指示されるものは言語外的な存在者だからである。命題を理解している時、そこに含まれている名が或る対象を指示しているはずであるということは確かに理解されていよう。これは命題の意味に属す事柄であるからである(27)。しかしその対象が実際にどれであるのかについての理解は未だ保証されているわけではない。石黒氏はペアノの公理系における原始記号(「0」、「数」、「後者」)を例と

して提出する。そして、これらの記号についてはその使用において記号の指示対象の相互関係が理解できるのであり、従って公理系が何を語っているのかが理解されればこれら原始記号の指示対象は既に同定されたことになる、と論じている。これは形式科学における無定義者に対する周知の方法であるが、右の議論の困難はまさにその点にある。『論考』のいう命題は事実記述であり、対象は世界のうちの個物なのである。それは数学的対象とは身分を異にしている。解明に関していわゆる脈絡的な定義を想定することには、元来困難があると言わなければならない。

しかし解明のこのような性格について、アンスコムは認識論の不当な介入であると『論考』を難じている(38)。論理学にとっては認識論は無縁であるとしながら、指示されるものの知識が解明に際しては要求されているからである。けれどもこの点は、名によって指示されるものが言語外的な問題に属しているということを示すだけであって、何ら『論考』の体系を侵すものではない。この知識がいかなる類いの知識であるのかについて全く触れられていないことが、この問題が有意ではないということを示している。肝心なのは、命題の理解と名の理解とのあいだに設けられた截然とした差別であって、『論考』の力点は前者の自律性にあるという点である。解明の事情はそれをよく示したものだと言えよう。

## 六

以上を通して我々は、原始的写像モデルから帰結する『論考』の論点のいくつかを検討してきた。その中心的論点は命題の意味の言語内在性にあることが確認された。これは、名によって指示されるものの言語外在性と極立った対照をなしている。後者は、『論考』が名に対して意味を認めず、対象指示機能だけを想定したことからの帰結である。他方前者は、意味が命題自身の構造として把握されたことに基づいている。これらの事情は原始的写像モデル自身が鮮明に物語っていると言えよう。

このように『論考』はその原始的な着想を徹底して昇りつめた成果なのである。もとよりその成否はモデル自身の妥当性如何によって最終的には決定されるであろうし、その妥当性に全くの疑念がないわけでもない。例えば、命題の構造を論じる場合に余りに所記言語へ傾斜しており、より第一次的な音声言語ではこれがどのようにモデル化されるのか判明ではない。更に基本的な問題としては、単項関係の処理ということがある。モデルは多項関係に対しては実によくできている。事実は諸対象の相互関係によって構成されるからである。しかしこの立場では、対象が或る性質をもっているという単項関係的な事実を整合的に処理しうるであろうか。この場合でもモデルは諸対象の相互関係によって答えている。つまり、我々の不透明な言語では単項関係と思われる事実も本来の構成要素のレベルにおいては実は多項関係である、と示唆しているように思われる。確かにそういう事例もあるだろう。また、メートル原器の類いを想定して、対象の性質はそれとの関係において決定されると考えることも可能である。しかしながら一般的には、この処理方法による解

決には困難がある。すべての性質を単位のカテゴリーに還元しうる保証はないし、原器自身が先に述べた対象の性格に適合するかどうか疑念があるからである。

この後者の点については認識論の問題だとして『論考』の枠外にあると言えないこともない。しかしこれらの問題はモデルの有効性を判定するための視点とはなるだろう。本稿ではこうした問題が残されていることは承知しながらも、モデルから何が帰結するかという点に重点をおいてその過程の検討を主題としてきた。この過程のうちにこそ『論考』の真価が窺えると考えるからである。モデル自身の妥当性については稿を改めて検討したく思う。

## 註

(1) Philosophische Grammatik, I-§ 19.

(2) Philosophische Untersuchungen (PU), I-§ 1.

(3) 固有名の場合、その指示対象を「意味」とよぶのには抵抗があるかもしれないが、術語の問題として一応片づけることができる（その際 Sinn には別の訳語を与えるかたちで）。しかし誤解を招きやすいので、本稿では三節以降 Bedeutung を「指示されるもの」と訳すことにする。

(4) PU., I-§ 116.

(5) ibid., I-§ 593.

(6) cf. T. 4.126—4.1274.

(7) 例えば『哲学探究』第二節で導入されている、建築家と助手との二人のやりとりがその一つである。

(8) この点で『論考』の取り扱う言語はすべて事実記述から成っている。言語のもつ行為的側面は最初から視野のうちにはない。

(9) ここで、事実の理解さえも既に言語に汚染されている、従って事実の構造から言語の構造を推理するのは転倒である、という反論が予想される。しかし個体把握のレベルでは仮りに言語による差異がありうるとしても、「〜は…の上にある」といった構造のレベルでは有意な差異は生じないと考える。このような構造の翻訳が言語間で可能であれば、事実から言語への推理もあながち不当とは言えまい。

(10) つまり要素命題においては、ということである。以下の検討では特に要素命題と断わらずとも、終始このレベルで議論されていることを了解されたい。また煩雑さを避けるため、誤解の生じる余地がない限り『論考』の術語上の区別（例えば、「事態（Sachverhalt）」と「事実（Tatsache）」との区別など）にも一々言及しない。

(11) すぐに思いつかれるのは、対象間の関係を名どおしの空間的配置ですべて書き表わすことの困難である。

(12) 傍点部分は、事実と事実との対応という論点の強調である。

(13) 以上の解釈はアンスコムに従う。 cf. G. E. M. Anscombe, An Introduction to Wittgenstein's Tractatus (Philadelphia, 1971), p. 101.

(14) Notebooks 1914—16 (NB), 16. 6. 15., p. 61.

(15) cf. T. 2.02, 2.021, 2.027.

(16) cf. T. 2.0231. 「大雑把に言えば、対象は色を欠いている」（二、〇二三二）とはこの比喩である。

(17) cf. T. 2.012, 2.0141.

(18) 単独の対象に構造を認める論者もいる。それは『論考』における単項関係の位置を巡って提出された解釈であるが、対象どおしの相互配置が構造を与えるという論点が過小に評価されている。 cf. W. Sellars, 'Naming and Saying', in: Essays on Wittgenstein's Tractatus (London, 1966), eds. by I. M. Copi & R. W. Beard, pp. 249—270.

(19) それにもかかわらず我々は先に対象を物とよんだ。これは既に或る

種の規定ではないかと反問されるかもしれないが、そうではない。物は『論考』においては形式的概念であり、何ら実質的な規定とはならないからである。

(20) ただし "bezeichnen" という語は『論考』では多様に用いられており（例えば、複合物の表示（三、二四）、形式的概念の表示（四、一二七）、対象の形式の表示（五、五二六一）など）、"bedeuten", vertreten", "nennen" が対象に関してのみ使用されているのとは一線を画している。

(21) cf. G. Frege, Die Grundlagen der Arithmetik (Breslau, 1884), s. 71, 73.

(22) 例えば、黒田亘、「『言語ゲーム』をめぐって」、「言語」第一巻第八号、一九七二年（同氏、『経験と言語』東大出版会、一九五一二〇八頁に所収）、を参照。

(23) これが否定の像を作ることができない理由である (cf. NB., 26. 11. 14., p. 33)。本来否定は像には属さない。その意味で、否定をはじめとする論理定項は像に対して超越的であり、その存在は写像理論からは直接には帰結しない。

(24) 解明が不可能だとするのは、D. Bell, 'Tractatus 3. 263', in: Language, Logic, and Philosophy (Wien, 1980), eds. by R. Haller et. al., pp. 220—223.

(25) この点で「これが『a』である」という直示的説明を解明と解する Hacker や、本来は無意味 (unsinnig) である哲学的解明 (cf. T. 4. 112, 6. 54) を解明と解する Nesher には同意できない。P. M. S. Hacker, Insight and Illusion (Oxford, 1972), pp. 48—51.
D. Nesher, 'The Nature and the Foundation of "Elucidations" in Wittgenstein's Tractatus', in: Wittgenstein and His Impact on Contemporary Thought (Wien, 1978), eds. by R. Haller et. al., pp. 142—146.

(26) 石黒美子、'Use and Reference of Names', in: Studies in the Philosophy of Wittgenstein (London, 1969), ed. by P. Winch, pp. 20—50.

(27) 「命題 "*fa*" は、その意味のなかに対象aが登場していることを示している。」（四、一二一一）

(28) Anscombe, op. cit., p. 28.